

---

# パンドラ・ブラック

御巫 銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンドラ・ブラック

### 【Nコード】

N2803I

### 【作者名】

御巫 銀

### 【あらすじ】

センター試験を明日に控えた高校生、久代天真は突然異世界に飛ばされてしまった。そこで色々な人々に出会いながら特に目標もなく、今日を生き抜くために頑張っていくお話。

いきなり川で溺れかけるし、怖い人達が押しかけてきて散々です。

by天真

## 第一話 嗚呼、異世界

秋が過ぎセンターまで残すところ一週間となった今日も俺はいつも通りコートを羽織り、

予備校へ向かうところだった。

平日の午前中だが先週から三年は受験勉強のため学校は無い。

忘れ物が無いか確認し、自転車に跨りいざ出発というところで急に視界が霞みだした。

最近の無理な勉強のせいかと思い、かけていた眼鏡を外して目頭をマッサージしてみるが、

とうとう目の前が見えなくなるほど世界が歪んで見えた。と、同時に。

「くう、うづう！」

とてつもない倦怠感、吐き気、頭痛の三点同時攻撃をくらい、意識が薄れてきた。

俺はその場にしゃがみ込みそれらをやり過ぎそうとしたが、一向に回復の気配が

見えないどころか激しさを増し、とうとう俺は意識を手放した。

「ぐぶおッ！」

ここが水中だと気づいたときには既に、鼻や口から大量の水が浸入し始めていた。

どうやら水の中にいるようだ。

ってというか冷静に分析してる場合じゃねえ！

俺は生命の危機を感じ、必死になって水面へ顔を出そうとするが、さっきまで着ていた

コート防寒具が水を吸い、どんどん水面から遠ざかっていた。

やがてもがく気力も尽き、酸欠のせい意識も薄れてゆく。

その時、とてつもない力で引っ張られ、一気に水中から飛び出し、釣られた魚のように

陸地に転がる。

「かはっ！はあ、はあ、助かった……………のか？」

なんとか呼吸を落ち着けそう呟いた後、周りを見回すと見た感じ十  
二、三歳くらいの

金髪碧眼の美少女が俺を警戒するように少し離れたところからこちらを伺っていた。

彼女の容貌から察するに外国人もしくはハーフのようだ。

「もしかして君が俺を助けてくれたのかい？」

俺は極力彼女を怖がらせないように話しかけた。少女はその問いかけに無言で頷く。

日本語が解るのか。なら話は早い。

「ありがとう。それでここはどこなんだい？」

「デイ・レイン川」

彼女の口から発せられた単語は日本語のようだが、それは明らかに横文字のようで、

日本の地名ではないようだった。

ああ、まさか、意識を失い気づいたら知らない場所、というフラグはもうあれしか

ないだろう。

久代天真、十八歳、どうやら異世界に来てしまったようです。

ところで今一番重要なことは、何故俺がここに居るのか。とか、どうやってたら帰れるか。

などではなく、どうやって今日を乗り切るかだろう。

俺にはサバイバルをした経験も無いし、食べられる野草も知らないのだ。

見ず知らずの土地で飢え死ぬ自分の姿が容易にできて急に不安がこみ上げてくる。

ふと、先ほど現在地を教えてくれた少女が目に入る。

「ねえ君、甘いモノとか好きかい？」

俺はそういつてポケットの中に入っていた飴を取り出す。

幸いしっかりと包装されていたので中身に影響はないはずだ。

しかし、少女ははまだ警戒していて近づいては来ない。

危険ではないことを示すために十個ある飴の一つを食べて見せた。

それで危険ではないと判断したのか、少女は俺から飴を一つ受け取ると

恐る恐る口に入れた。

「・・・おいしい」

「そうかい。そりゃ良かった。ところで君の名前を教えてくれるかな？」

少々汚いがこの世界との接点が無い俺には目の前の少女をお菓子で買収するしかないのだ。

「名前は教えちゃダメってお母さんに言われているの」

まずい、このままバイバイ、なんて言われたらどうしようか。

「どうしてダメなんだい？」

俺は諦め悪く少しでも長く会話を続けようと試みる。

「勝手に契約を結ばれちゃうからなんだって」

一体契約とは何のことなのだろうか。

「マナっ！何してるのっ!？」

一人少女の言葉の意味を考えると少し離れたところから目の前の少女に良く似た

女性がものすごい勢いでこちらに走ってきた。

そして、少女を守るように体で少女を隠し、般若の形相で俺を睨んできた。

「あなたは一体なんなんですか？どうしてこんな所にいるんですか？」

とりあえず誤解を解かなくては。どうやら彼女は女の子の母親で、俺は変質者か

何かだと思われているようだ。

俺は事の顛末を包み隠さず話すと、少女の母親らしき女性は信じら

れないという

顔をした後にこう呟いた。

「にはかには信じられませんが、先ほど感じた強大な魔力の流れのせいなの

でしょうか………失礼しました。私の名前はナナです。そしてこの子は娘のManaです。

本当の名前では「ごいませんが、そう呼びください」

「わかりました。では私のことはテンマとお呼びください。それと一つ質問を

よろしいでしょうか？」

「ええ、答えられるものならば」

「さきほど仰っていた魔力というものはなんなのでしょうか？」

この質問の後、ナナさんによる魔力と魔法のレクチャーが日が暮れるまで続いた。



## 第一話 嗚呼、異世界（後書き）

はじめまして！

御巫 銀と申します。

稚拙な文章をここまで読んでくださってありがとうございます。

これからも時間を見つけて更新していきたいと思っております。

どうぞよろしく願います。

## 第二話 一ご馳走

「……………というわけなのです」

魔力やそれに関係する諸々を話し終えたナナさんはどこか満足げな表情だったが、

俺はずっと座りっぱなしだったのでげっそりとしていることだろう。

ちなみにマナちゃんはナナさんが話が始める気配を見せた瞬間に脱兎の如く

逃げ出していた。きっとこういつ展開になることを知っていたのだろう。

そして、マナちゃん自身もこの講義を受けたに違いない。

「あら、もうこんなに暗いじゃないっ」

さも今気がついたというリアクション。よほど教えるのに集中していたのだろう。

夜には魔物が活性化して外は危険だからということなどでナナさんの家に招待されることとなった。

「お邪魔します」

俺は一声賭け家に入ると、中からはおいしそうな匂いがただよって

きた。

見ると入ってすぐのところにあるテーブルの上に三つのおわんが並べてあって、その

中央には小さめの寸胴鍋があり匂いはそこから漂ってきていた。

「ありがとう。お夕飯作っておいてくれたのね」

「うん、わかってたから」

どうやらマナちゃんは料理ができるようだ。

昔の子供は家事をよくやっていたということは知っていたけれど、実際に自分より小さい子が家事を

やっているところを見ると不思議な感じがしたし、なによりできない自分が恥ずかしく思った。

そしてやっぱりナナさんの話が日が暮れるまで続くことが分かっていたようだ。

「いただきます」

「いただきます」

三人が席に着きすっかりと手を合わせてから食べ始める。

寸胴鍋に入っていた料理はシチューだった。それに味も家で食べたのと同じでの違う点といったら肉が

入っていないことと野菜が違うことぐらいだろう。

「マナの作ったレーシユ、おいしい?」

さっきまでは気づく「かなかったが、どうやら空腹だったらしく、夢中で目の前の料理を

食べていた。するとマナちゃんがキラキラした瞳でみつめながら感想を尋ねてきた。

「どうやらこの食べ物はレーシユというらしい。」

「ああ、おいしいよ。たぶん今まで食べたどんな料理よりも美味し  
いんじゃないかな」

それは普通のスープだったが、俺にとっては初めて訪れたこの地で、  
たった一人だった

俺を包み込むような暖かさと幸福感を与えてくれたご馳走に違いなかった。

「ありがとう」

そう言うてくれたマナちゃんの笑顔は翳っていた心を照らす太陽だった。

「とじろで、テンマさんはこれからどうするのですしょうか?」

食事を終えたところでナナさんが尋ねてきた。

実に返答に困る質問である。この世界でいく当ても、目的もないのだから。

「もしよろしければしばらく家に居てマナの話相手になっていただけないでしょうか？」

それに、魔法についても習っておいて損はないと思いますよ」

「こちらこそお願いします。僕にできることがあれば何でもしますので」

これではらくは飢えと風雨はしのげる。さらに魔法まで教えてくれるというのだから

願ってもない申し出だった。

案内された部屋はベッドしかない部屋で、ナナさんの旦那さんの部屋だという。

俺はさっそくベッドに横になると、異世界という慣れない環境のせいかすぐに睡魔が

襲ってきてすぐに意識がうすれていった。

## 第二話 一ご馳走(後書き)

テストが近いです。

ちよっと短いですが、次はテスト明けに更新します。

### 第三話 魔法と薪割り（前編）

魔法と薪割り

「テンマさん、起きてください。朝ですよ」

「……………うう。ナナさん、おはようございます」

「はい、おはようございます」

眠気眼で起き上がり、突き上げ窓を開け外を見るとまだ朝日が完全に昇りきって

いなかった。昨日まで毎朝七時半に起きていた自分がよくこんな時間に起きれたなど

思ったが、きつと寝たのがいつもよりずっと早かったからだろう。

朝の挨拶を交わすとナナさんは着替えを用意してくれていて、着替えたら外に出てきてください、と言って部屋を出て行った。

この着替えもナナさんの旦那さんのものらしい。かなり余裕があるのできつと体格の良い人なのだろう。

外に出てナナさんに案内されたところには切り株があり、その近くには薪に使ったための木が山積みになっていた。

「ではテンマさん。この薪を割ってみてください」

「わかりました。でも斧がないんですが」

「ええ、手で割ってください」

薪割りを頼まれたが斧が無く、手刀で割ってくれということだ。

俺には空手の経験もないし手に刃物のような切れ味を持たせるといった特別な能力

もないので素手で木を割るのは不可能だと断言できる。

「無理です」

「ええ、わかっています。逆にやられてしまつとこっちが驚きますも

の。では、少し離れてください」  
俺が離れるのを確認するとナナさんはおもむろに手を振り上げそのまま木に振り下ろした。

スコン

木が割れる乾いた音がこだまし俺は驚愕の出来事に目を見開いていた。

「ナナさんって見かけによらず、力があるんですね」  
「つついそんな言葉が口から漏れてしまった。」

「今のは力技ではありませんよ。魔力による身体強化です。魔法を使えば木端微塵にできます」

「でも俺魔力を感じることもできませんよ」  
そう、俺の世界には魔力なんてモノはファンタジーの中にしか存在しなかったのだから。

ナナさんの魔法講義で魔法は体内の魔力を感じとり、想像力によりその性質を変化させる  
ものであるというのを聞いた。

「ええ、一般に魔力に目覚める為には他人の魔力を体に流し込まなければなりません。」

まあ中には生まれた時から魔力を感じることが出来る人や視認することのできる特殊な人もいますが」

「他人の魔力つて体に流しても大丈夫なんですか？」

「ええ死にはしません。ただ………」

「ただ？」

「その人の精神が流し込まれた魔力に飲み込まれ崩壊し、廃人になってしまうことが」

あります。まあ血縁者から魔力をもらえば安全なんですがね」



ちよ、廃人て。絶対に無理だろ。いやここは信じるしかないだろう。きつと異世界に飛ばされた俺には主人公補正がかかっているんだ！  
「それじゃいきますよ」

「えっちよ待つてくださいいっ、心の準備が」  
まだできてない。と言おうとしたところでナナさんは俺の腕をがっしりと掴んだ。

その瞬間掴まれた所からまるで電流の如く痛みが全身を駆け抜ける。そして声を上げる間も無く俺の意識は遠のいていった。

目をあけるとそこは真っ白な何もない空間だった。

四方を見回しても誰も居ない。先ほどまで俺はナナさんの家の裏に居たはずなのに。

覚醒ノ時ガキタカ  
どこからともなく声が聞こえるが人の姿はおるか生き物の気配も  
ない。

そして声が出せない。必死に喉を震わせるがまるで音というものが存在しないかのような

この世界で再び先ほどの声が聞こえる。

今シバラク我八眠リニ就コウ

約束ノ時ガクルマデノ間我ガ『能力』貸シ与エヨウゾ

#### 第四話 魔法と薪割り（中編）

再び目を覚ますとそこには心配そうな顔でこちらを見つめるマチちゃんの顔があった。

起きなくてはと想い体を動かそうとすると全身に激痛が走り唸り声が漏れてしまった。

「あつ、まだ起きちゃダメだよ。完治してないんだから」

起きようにも体が動かないんじゃないしょうがない。

「ああ、そういえば俺どのくらい寝てた」

「うーんとね、今日で倒れて四日目だから三日かな」

そうか三日も眠りこけていたのか。三日も寝るなんてゲームや小説の中だけだと

思っていたけど、案外普通のものなんだな。そういえば色々なことがあって有耶無耶に

なつてたけどもうセンターはとっくに過ぎていくということに気づいた。

一人憂鬱な気持ちで俯いているとナナさんが入ってきた。

「あら、テンマさん。気がついたんですね」

ええ、気がつきたくないものにも気づいてしまいました。浪人確定だという事実には。

「はい、おかげさまで。まだ体は動きませんが」

「いえ意識が戻っただけでも良いですよ。それにあなたを見たときから魔力の

素質を感じていたので予想通りではありませんが」

そうだったのか。それを聞いて安心した。

意識が無くなる前に見たあのキラキラした目は人に魔力を流し込みたかったからじゃないのか。

「ところで、明日から薪割り兼魔法の修行を始めるので今日はゆっくり休んでくださいね」

あ、また目がキラキラモードになってる。

「いや、でも指一本動かせないんですけど……」

「大丈夫、それは魔力の通り道を開いているからです。三日も寝たのですから明日には

今までに無いくらい体が軽く感じるはずですよ」

そう言い残すとナナさんは部屋を出て行き再びマナちゃんと二人きりになる。

「ねえ、あなたのことお兄ちゃんって呼んでいい？」

いきなりマナちゃんがそう切り出してきたのでビックリした。

見るとマナちゃんの顔は真っ赤になっている。よほど恥ずかしいのだろう。

「もちろん良いよ。君はこの世界の家族だからね」

「うん、ありがとう。それと君じゃなくてちゃんとマナって呼んでね」

「ああ、わかったよ。マナ」

そう答えるとマナが満面の笑みを俺に向けてから、小走り部屋を出て行ってしまった。

「家族……か」

一人になった俺はふともこの世界にいる家族のことを思い出した。

あの両親のことだからきつと元気にやっているんだろう。家族に会えない寂しさはあるが、

それよりも今は新たな家族ができたことに対する喜びが大きかった。

## 第五話 魔法と薪割り（後編）

### 第五話 魔法と薪割り（後編）

翌日、目が覚めて体を動かしてみるとナナさんの言っていた通りに体がとても軽かった。

朝食中にマナが俺のことをお兄ちゃんと呼んだときにナナさんに凝視された、が事情を

説明したらナナさんも快く家族として受け入れてくれた。

そんなわけで俺とナナさんは再び家の裏の切り株の前に来ていた。

「さて魔法を使う前に基礎となる魔力の制御の訓練をしたいと思いません。ではまず始めに

魔力を認識することから始めます。目を瞑り意識を集中してください。そうすれば以前

には感じなかった力が自分の内にあるのがわかるはずですよ」

ナナさんの言うとおりに目を瞑り意識を集中する。

暫く意識を集中していると突然違和感を感じ始めた。

体中を微弱な電流が走っているかのような感覚で、それはちょうど魔力を流し込まれた時

の感覚を薄めたようなかんじだ。

「魔力を確認できましたか。それでは次に魔力を体の外側に出すイメージを持ちながら、

意識を集中してください」

体を駆け巡る電流、そのベクトルを体外に向けるよう意識すると徐々にだが体が熱を

帯び始めた。

「筋が良いですね。さすが私が見込んだだけのことはあります。もう止めていいですよ」

そういわれて集中を解く。

その途端体の奥から先程感じた魔力とは比べ物にならないほどの激流が体外に向かって流れてきた。

「つつ、・・・くう！」

これはマズイと思った俺は必死に食い止めようとするが、抵抗もむなしくはじけるように

魔力が迸る。瞬間、世界が純白に染まり音も色も感覚さえもが消え、意識が薄れていく。

俺って気絶しすぎじゃね？と思う今日この頃。朝早くに起こされた俺は体の痛みが引いていないにも関わらず、家の裏に引つ張りだされた。

なんでも昨日遅れたぶんを取り戻すのだそうだ。あと、昨日のアレは魔力の暴走だとも聞かされた。

「単刀直入に言います。おそらくあなたは魔法を使うことができません」

毎度おなじみ切り株の前で、いきなりそんなことを言われた。

一応魔力に目覚めたのに……暴走したけど。

「でも魔力があるんですから修行を積みばなんとかなるんじゃないですか？」

「ええ確かに魔力はあります。というか寧ろ多すぎるのです」

それから俺の魔力は一般の魔術師一億人相当の魔力を保有しているということを知った。

聞いた。

俺もこれには驚いたが魔力は多いほうがいいのではないかな？

そう思ってたナナさんに訊くと、

「多すぎると安定した魔法の行使ができないんです。そしてなまじ魔力が多い分暴走

したときの被害が予想できないので、魔法は諦めてください」

と言われてしまった。

せつかく異世界にきたのだから魔法を使ってみたいと思っていた俺の願望は早くも

崩れ去ったのであった。

ナナさんは俺のもの凄く落胆している顔を見て苦笑しながらこう仰った。

「安心してください。魔法は危なくて使えないのですが、あなたの魔力は密度が高いので人と違ったことができると思います」

おお一筋の光が！主人公的には普通の魔法とかナンセンスだよな。

「それで人と違ったこととはやはり密度と干渉力の関係を利用したものですか？」

俺がそれを記憶していたことがそんなに驚いたのかナナさんは信じられないという表情をしている。

「ちゃんと聴いてましたからね。これくらいは覚えていますよ」

これでも記憶力には自信がある。逆に自信があるのは記憶力くらいしかない。

「はい。以前お話したとおり、魔力の密度が高いほど世界に対する干渉力も上がります。

あなたの魔力の密度は常人より遥かに高く、魔力量も桁外れなので魔力の物質化、さらに、

固定化することが可能だと思えます」

ナナさんが話し終わると同時に意識を集中し、両手から魔力が染み出しそれが刀の形に

なるようにイメージする。すると案外簡単に魔力の刀が作れた。

その刀に質量は無く、わずかな魔力の光がその存在を感じさせるだけだ。

「こんな感じですかね？」

即席で削った魔力の刀を目の前にあった薪に振り下ろす。

すると大した抵抗も無く薪は真つ二つに斬れ、ナナさんが絶句する。

「えっと、何をしたんですか？」

「ただ、コレで薪を斬っただけですけど……もしかして見えませんか？」

すると、ナナさんはゆっくりと、まるで目の前の出来事が信じられないようだが頷いた。

俺にはうつすらと光を放っている刀だが、どうやら他人からは見えないらしい。

……もしかしたらこの力は相当危険なモノなのかもしれない。

虚空から刀を創り出し、それが他人から見えなかったら、それは恐怖以外の何物でもないだろう。

## 第六話 魔龍大戦

さて、私久代天真はとてつもないチート能力を手に入れてしまったようです。

能力に覚醒してから一ヶ月が経った現在、色々なことを試した結果こういう結論に行き着いた。

まず、俺の能力についてなのだが、これは魔力単体での世界に対する干渉力を限界まで高め、それを刀の形状に固定し、「斬る」というイメージのみで成立している。

通常世界に干渉するためには魔力を魔方陣や呪文などの詠唱によるなんらかの『式』を通さなければならず、また属性を与えなければ安定しないのだ。

例えば「斬る」といってもそのかたちは様々で、炎で焼き切るといったことや風で切り刻むといったように明確に「斬る」のかたちをイメージし、呪文の詠唱などを行わなければならない。しかし、俺の魔

力量とその密度が常人離れしており、「斬る」程度のことならゴリ押しでいけてしまうのだ。

しかも、この能力は応用が利き、一度に何本もの刀を出したり、それを同時に空中で操作できるといった芸当も可能だった。

ただ、この刀が他の人間には見えないというのが不思議だった。



そう、この見えない能力こそが俺のチート能力である所以なんだ。しかも今のところこの能力を使うことにデメリットがない。どんな攻撃だつて見えれば対策はできる。けど見えない攻撃に対しては完全に己の勘だけで挑まなければ

ばならない。俺がもしこの能力を持った奴と戦うんだつたら尻尾巻いて逃げ出すね。ていうか、不可視

の攻撃とかせこくてあんまり使いたくないなあ。それに、いつしかこの強大な力を軽はずみに使つてし

まうかもしれない。そうなればきっと我が身を滅ぼすであろう事は明白だ。

昼食後に部屋で休憩しながら自分に与えられた能力について思索している。と部屋をノックする音が聞こえ思考を中断する。

「私です、入りますよ」

ナナさんが真剣な面持ちで部屋に入ってきた。何かあるのだろうか？

「あなたの能力について以前書物で読んだことを思い出したので」

「何かわかったんですか？」

「ええ、あなたの能力が千五百年前に活躍した英雄、剣姫ジャンヌ  
＝ローゼリア

について記されたことと関係があるかもしれないと思ったので来ま

した。」

曰く、その剣姫は不可視の剣で立ち塞がる者は全てを葬ったとか。曰く、絶大な魔力を保有しながらも魔法を使っている姿を見たものはいないとか。

最後は愛した男に裏切られて死んだらしい。英雄といっても所詮女性だったということか。

まあこれは男にも言えるんだがね。恋愛は人を強くもするし弱くもするのは異世界でも共通なんだろう。

「ところで、第一次魔龍大戦ってなんですか？」

うん、こういう一般常識みたいなのは知っておいた方が良さそうだしね。

「魔龍大戦とは今から千五百年前と千年前に起きた魔族と龍族による人間界への侵攻です」

「よく人間は滅びませんでしたね。魔族も龍族も人間より強いのでしょうか？」

「ええ、身体能力や魔力では人間は圧倒的に劣っています。ですが、人間には現代では考えられないほどの科学技術が発達していましたし、なりより剣姫の存在はとても大きかったようです」

なるほど、現代ではってことは今は衰退しているのか。

そこら辺をナナさんに聞くと、どうやら人間は第二次魔龍大戦の折

に一度滅びたらしい。

「ですが二度の魔龍大戦とも人間が勝利し、今では魔族も龍族も人間に虐げられているのです。・・・それでは私はこのへんで。夕飯の準備がありますから」

最後にそう締めくくったナナさんの表情はとても悲しそうだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2803i/>

---

パンドラ・ブラック

2010年12月18日14時17分発行